

まぼろしの留萌屯田兵村

福士広志

海のふるさと館学芸係長

北海道における屯田兵制度は明治六年（一八七三）十二月に時の開拓使次官黒田清隆の建白書によって創設された。これは北海道、樺太の移住民の保護と対ロシアにたいする国防の上から北海道に軍備の配置が必要であるという見地から提案された。

そしてその軍隊とは、屯田兵という自給自足を前提とした軍隊であった。これは明治新政府が成立したばかりで、経済的にもまだ自立していなかったことから、なるべく経済的な軍隊の配備を計画したものであった。

この屯田兵制度をいち早く留萌に適用しようとした男がいる。佐藤正克という。

佐藤は明治六年十二月二十六日付で開拓次官黒田清隆に「屯田ノ制ヲ建ツルノ

議」を建議した。彼は明治六年二月六日に留萌支庁が設置されると十二月留萌詰の官員となった。そして、精力的に公務をこなし、留

地は未だ開発されておらず人口も少ない。ここに屯田兵をいれ、罪人を移して札幌への新道の開き、材木、漁撈、農業などの職務につ

いる。ここに本部を置き、その後分隊を数箇所へ置く。このようにすることによって北辺の防備を完全なことにすることができると共に、北海道の留萌、天塩、宗谷、北見に開拓に入殖するものが増え、この地も暫時栄えていくことだろう。」としている。

この建議は黒田次官の目にとまったかどうかは知らないが、黒田の建白による屯田兵制度は翌年明治七年十月「屯田兵例則」として定められ、札幌郡の琴似村に二百戸の兵屋が建設され、翌年五月最初の屯田兵百九十八戸九百六十五人が入殖した。その後明治三十二年（一八九九）まで各地に屯田兵村が建設されたが、留萌には屯田兵村はとうとう建設されることはなかった。

彼の建議は採用されることはなかったが、万一この建議が採用されていたとしたら留萌はまた別の道を歩んでいたかも知れない。



琴似屯田兵村



夜空を焦がした1700発の花火

留萌三大夏祭りの最後を締めくくった'93るもい呑まつり。

海の火祭り、納涼花火大会、やん衆あんどん、千人踊りなどが行なわれ、訪れた大勢の観客を魅了し、参加者は燃え尽き、迫力満点の夏まつりが終わった。



「セヤ、サーノ」「セヤ、サーノ」威勢よい声を上げた翠連会



太鼓のリズムに合せ跳び回る「はねと」



熱い感動をあたえてくれた留萌自衛隊の千望太鼓

93るもい呑まつり

留萌がうねり、夏が沸く

